

吾々は幼児を尊重する

人でなければならぬ

吾々は幼児を愛する人でなければならぬ。吾々は幼児の爲を思ふ人でなければならぬ。しかも、それだけでは足らぬ。吾々は幼児を尊重する人でなければならぬ。

幼児を尊重するといふことには、いろ／＼の意味を含む。第一、幼児を一個の人格として尊重することである。此の子が成人したら、如何にえらいものになるかも知れない。故に、今は小さい子供だからとて、これを輕侮してはならぬとは、人のよく言ふ處である。又、之れ大切の家のあとゝりである。大切なる第二の國民である。故に心して尊重しなければならぬとも、よく言はれることである。之れ等の考へは孰れも正しい。こういう意味からでも眞に幼児を尊重するならば、それは結構なことである。しかし、かういふ考へ方の他

に純な一個の人格として、小さくとも一個の人であるといふ尊重をも感じなければならぬ。吾々の被保育者であるには相違ない。しかし、それは吾々との教育の作用上の關係に於て被保育者の位置に置かれて居るので、其の人格としての絶對の尊嚴は、被保育者なるが故に保育者たる吾々と一毫の上下あるものではない。吾々は幼き被保育者として取扱ふことにのみ慣れて、一個の人格として尊重することを忘れてはならない。抑も教育の最後の目的は、被保育者の人格的尊嚴を擴大し、完成するにある。果して然らば、先づ人格として尊重することなしに、何の教育が出来やうぞ。徒に、軽く淺く、幼児を被保育者としてのみ遇して其の人格を尊重してやらないならば、之れ實に人の子を賊するものといふべく、又人の道として最大の罪惡である。

○

人格としてのこの尊嚴は、大人と雖も幼児と雖

も變りはない。しかし、其の人格の内容的價值は幼兒に於ては未だ小さい。是に於て、吾々は、幼兒を人格として尊重しつつも、具體的に、實價的に、之れを小さきものとしか見られない。之れは勿論一通り無理のないことである。また、それが必ずしも悪いことではない。しかし、吾々は或る一事に注意を向ける時、具體的にも、實價的にも、幼兒の生活を尊重せざるを得なくなる。その一事とは何か。發達といふことである。幼兒の自ら有して居る、其の偉大なる發達の力である。

幼兒の現在は未發達者である。しかし、非常なる發達力を有するものである。彼れの本質は、其の未發達なる幼弱状態それ自身ではなくして、旺盛なる發達それ自身にある。吾々は、此の點に於て幼兒を見る時、たゞ驚嘆し、尊崇することを知るのみである。元より、此の發達力は各幼兒によつて大小の差のあることもある。しかし、如何に小なるものも雖も目ありて見得るものには、驚かるゝの他はな

いのである。而して、此の發達なるものは、幼兒各自が有する處ではあるが、それは寧ろ自然それ自身が有す處のものである。それが幼兒にあらはれて居るのである。是に於て、吾々が幼兒の發達に驚嘆することは、即ち自然の大に驚嘆することである。此の意味に於て幼兒を尊重することは、すなはち自然を尊重することである。反對に、此の意味に於て幼兒を尊重することを知らないものは、自然を尊重することを知らないものである。愚といはざるを得ない。しかも亦、自然の理法としては『發達』を理解して、一人々々の幼兒に於て此の尊重を感じ得ないならば、之れ實に空なることゝ言はざるを得ない。

○ 幼兒を尊重するものにして始めて其の尊重すべき幼兒を教育する自分の事業を尊重することが出来る。かくて、吾々が幼兒を尊重することを知らない時に吾々は幼兒を輕侮すると共に、吾々自分を輕侮することになる。